

# チャンドラキールティの縁起解釈について ——ナーガールジュナの著作と「相互依存」解釈との関連を中心として——

永 崎 研 宣

## 0. はじめに

中観思想における縁起解釈についての議論は、旧来、サンスクリット原典が広く流布している PP に依拠するところが大きかった。たとえば、中村元 [1946] に展開される如く、「ありかた」同士が相互に依存し合うが故に無自性であり、空なのである、という CK の解釈こそが中観思想における特徴的かつ画期的な縁起解釈であり、これを説いたのがナーガールジュナ（以下、NA）である、とされたのである。

しかしながら、近年の研究は、NA の正統な後継者を自認するチャンドラキールティ（以下、CK）の NA 解釈があくまで CK 独自のものに過ぎないということを明らかにしつつあり（斎藤明 [1998] 等参照）、中観思想の根幹をなす縁起思想の解釈についても「相互依存 (parasparāpekṣā)」という解釈によって CK が独自の内容を読み込んでいるということが山口端鳳 [1991] において指摘されている。

正統説を自負する CK は、自ら NA の著作を規定しつつ、それらの諸著作に基づいて NA の思想を解釈しているのだが、CK は、「相互依存」解釈を導出するにあたって、MK よりもむしろ他の NA 著作に多くを拠っている。すなわち、「相互依存」解釈について、CK は、MK と他の著作との間になんらかの差異を認めていたと考えられるだろう。本稿では、CK による NA 諸著作からの「相互依存」解釈の導き出し方を明らかにしていきたい。NA の思想が MK を中心に研究され、MK の著者と同一作者であるかどうか NA の著作問題を決定づけることになる以上、このことは、中観派の思想史や NA の著作問題を考えていく上で一定の意義があると思われる。

## 1. NA 著作と「相互依存」解釈

CK は「相互依存」という縁起解釈を行っているが、NA 著作との関連でみてい

くなら、それらは大別して二通りの関係に対して用いていると考えられる。

一方は、MK の VIII-12,

作用に縁りて作者が、そして、その作者に縁りて作用が生起する。成立の因を [我々は] 他に見ない。(MK VIII-12, p.12)

に見られる如く、作用／作者に代表される、存在レベルでの依存関係 (a)、である。これに対して CK は、両者の関係が互いにとって不可欠であることから、両者が「相互依存」であるという。

他方は、縁起について説かれる RTV 第 1 章第 48 偈

此あるが故に彼生ず。例えば、長あるが故に短があるように。これ生ずるが故に彼生ず。灯火が生ずるが故に光が生ずるように。(RTV I-48, p.20)

における長と短の喩例に見られるような、対概念の論理的依存関係 (b) である。MABh において、CK はこの偈を MK VIII-12,13 と共に引用し、縁起を説明するものであるとしており (MABh p.227)、PP において、「短に縁りて、短に到達して、すなわち、短に依存して (apeksya) 長が存在する」と読み替えている。(PP p. 10)

(a) の関係については、MK から直接的に導き出せているとみてよいだろう。では、CK は、(b) の関係を MK において導き出せているだろうか。PP においてそれを試みていると思われるのは MK の XXIII-10,11 に対する注釈である。

それに縁りて我々が浄を施設するところの不浄、それは浄に依存せずには存在しない。それゆえ、浄のみでは有り得ないのである。

それに縁りて我々が不浄を施設するところの浄、それは不浄に依存せずには存在しない。それゆえ、不浄のみでは存在しないのである。(XXIII-10,11 MKp.32)

これらの偈は A/非 A という関係がそれぞれ他方に依存しなければ成立しない、と説かれており、あくまでも、「依存しなければ存在しない」と否定の表現にとどめられているのだが、PP ではこれを、sambandhyantarapadārthasāpekṣā と呼び、浄は不浄に、不浄は浄に依存して成立するのであるとする。(PP pp.458-459) そして、さらにここで、RTV の長・短の喩例を引用している。すなわち、直接に導き出したわけではないが、そこに「相互依存」を見出していると言えるだろう。

次に、ŚS 第 11 偈をみてみよう。ここでは、

無明は行なしでは生ずることはなく、それ [無明] がなければ行は生じない。この両者は相互に因となっているので、自性としては成立していない。(ŚS p.250)

と説かれている。行が無明の因となる、という関係は、十二縁起を説く MK 第 26 章においては説かれていない。この関係は、存在レベルではなく、対概念の論理的依存関係である。すなわち、この点について CK は、ここの主題が因・果で

あることを理由に因・果と読み替え、因の因性は果を前提として成立しているのだとする。この場合の因・果は、(b) の関係が読み込まれているとみて間違いないだろう。そして、「相互に因となっているので」という偈文を「相互に依存しているが故に」と注釈した上で、自性としては成立していない、とする。ここでは、「相互依存」が無理なく肯定の形で導き出されている。そして、ここでもまた、RTV の長・短の喩例が引用されている。(ŚSV p.250) なお、CK は、ŚSV で、この後も、相互依存であるが故に無自性であるという議論を展開する。(特に ŚSV pp.252-253)

## 2. まとめ

ここまで、RTV, ŚS, MK と「相互依存」の解釈との関係についてみてきた限りでは、CK は、「相互依存」解釈における (b) の関係を NA 著作から導き出す場合、RTV の長・短の喩例に拠っており、さらに、ŚS に拠ることで、(b) の関係としての「相互依存」に肯定的な意味を見出している。そしてそれらに基づいて、MK に (b) の関係を読み込もうとしているとみられる。すなわち、CK の「相互依存」解釈は、ŚS や RTV に多くを拠っているのである。

RTV 及び ŚS が NA の著作であることについて、Madhyamakāśāstrastuti 第 10 偈をはじめ、CK はあちこちで言及しているのだが、以上の検討を踏まえ、これらの著作の思想内容については、RTV, ŚSV の著作問題も含め、さらなる比較検討が必要であると思われる。

### 参考文献：

中村元 [1964]: 『『中論』における「縁起」の意義』『密教文化』。斎藤明 [1998]: 『空と言葉』『宗教研究』。山口瑞鳳 [1991]: 『日本に伝わらなかった中観哲学』『理想』。

### Text：

MK: de jong, J. W. ed.: *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, Madras, 1977.

MABh: Poussin, Louis de la Vallée ed.: *Madhyamakāvātāra par candrakīrti*. St. P\*tersbourg, 1907-1912.

PP: Poussin, Louis de la Vallée ed.: *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica 4, St. Pétersbourg, 1903-1913.

RTV: Hahn, M. ed.: *Nāgārjuna's Ratnāvalī*, Bonn, 1982.

ŚS: Śūnyatāsaptati. Text は ŚSV に拠った。

ŚSV: Erb, Felix ed.: *Śūnyatāsativṛtti*, Tibetan and Indo-Tibetan Studies 6, Stuttgart, 1997.